

巻頭言

自然を謙虚に見る眼を養う

静岡県危機管理部 危機報道監

岩田 孝仁

日本の国土は、海・陸のプレート境界に位置し、地震や火山など地学的な変動の激しい大地を抱え、気候的にも春夏秋冬の四季を持ち、時には台風のような激しい気象現象にも襲われる。自然の変化に富むこの豊かな自然環境のおかげで、国土は狭隘であっても1億3千万の人々が生活を営み、日本古来の文化と多くの産業が育まれてきた。

日本社会が高度に成長する中、この四半世紀の間に1995年阪神・淡路大震災、2011年東日本大震災という2度の大地震に見舞われ、さらに東日本大震災では人災ともいべき福島第1原子力発電所の重大事故が発生した。このような大地震や大事故を目の当たりにし、工学の世界でよく耳にする「経験工学」という言葉には少し違和感を覚える。理学や工学だけでなく人文社会全般において、確かに経験してみても初めてその問題点に気づく事柄もある。一方で、災害や事故を経験しなくても予め解明でき対処できる事象もたくさんある。問題は社会がそれを真摯に受け入れてこなかった（これなかった）ことであり、そのため改善もできず多くの命の犠牲に繋がったのではないかとの思いが強い。

阪神・淡路大震災から18年が経ち、良い意味で神戸の街並みもすっかり変わってしまった。震災直後、神戸に入った時の衝撃は今でも忘れない。高速道路や新幹線の高架橋が崩れ落ちビルが倒れている光景には、正直これが本当に日本かと思った。兵庫県公館の庭に静岡から持ち込んだ大型ドームテントを張り、ひと月半に渡る支援活動が続ける中、多くのことを考えさせられた。六甲山を隆起させてきた活断層が神戸の直下に横たわっていることは専門家の誰しもが知っていたはずである。自分たちの時代には動かないと思っていた専門家はいるかもしれないが、活断層が直下で動けば震度6や7程度の揺れになり、耐震性の劣る建物や不安定な構造物は大きな被害を受ける。その中に巻き込まれれば多くの犠牲者が出ることぐらい、少し想像すれば誰しも理解できる。しかし、何の手立てもしてこなかったのが事実である。

東日本大震災の発生から丸2年が経つ。被災地の傷跡は未だ修復すらされていない。当時、被災地の支援になかなか入れず、ようやく3月25日に岩手県の沿岸に入り、想像を超

える津波の破壊力に息をのんだ。壊滅的に被害を受けた地元自治体の手足となるという信念で多くの職員を連れて現地の支援活動に当った。明治、昭和、チリと、100年余の間に3度の大津波に襲われ、津波対策は充実していた地域である。確かに多くの犠牲者を出したが、避難場所となる小・中学校の多くは高台に位置し、また住民の日頃の避難訓練が生かされ助かったという事例もたくさん聞いた。

山田町の中心部に御蔵山という丘がある。聞くと1611年の慶長三陸津波の後、山を削って人工高台をつくり、津波から年貢米を守るため米蔵を造った場所とのこと。今回も多くの住民がこの高台に避難して助かった。400年経った今でも地域を守った「命山」である。大津波を想定していなかった仙台平野から福島県にかけても、古くは貞観時代に津波に襲われたことや奥州街道の宿場が津波を避けるかのように造られているなど、災害の経験が地域には残されている。なぜこのような史実が現代の防災に活かされなかったのか、本当に悔やまれる。様々な史実や予測からどのような現象が発生し災害に結びつくのか、被害を抑えるためにはどのような予防が必要なのか、各分野の専門家が集まれば相当程度は解明できる。ただしそれを現実の対策に活かさきれていないところに大きな課題が残る。

人工的な構造物に囲まれライフラインにどっぷり依存した生活に慣れてしまうと、自然現象の先を読むという感覚が薄れてしまう。本来、大自然の中で人間が生活するうえでは幾多の災害危険を察知し対処してきたはずである。察知する力には経験とそれを補う知識が必要であり、対処力には知恵や能力と決断が必要である。東日本大震災を受け、文部科学省が「防災教育」をカリキュラムに入れるとのことだが、その前にもっと基本的な素養として、生活する大地や自然に触れ、日常として自然の変化を理解する力を身に付ける必要がある。自然を謙虚に見る眼を養う、それが自ずと防災につながる。そのような教育であり社会への橋渡しの担い手が、自然災害科学に関わる専門家に望まれているのではと考える。

三陸沿岸の各地に過去の津波の教訓を残す多くの記念碑が建てられている。震災当時の山田町長沼崎喜一氏が昭和三陸津波の「津波の碑」についてこんなことを語ってくれた。「子供からお年寄まで町民は皆この記念碑を知っていた。にもかかわらず、今回の震災で多くの犠牲者を出してしまった。震災の教訓はどうしたら生かし続けることができるのか。」ちょうどその記念碑の直下まで津波が押し寄せ、街並みは消え去っていた。

- 津波の碑
- 一、大地震の後には津波が来る
 - 一、地震があったら高い所へ集まれ
 - 一、津波に追われたら何処でも此処位高い所へのぼれ
 - 一、遠くへ逃げては津波に追いつかれる 近くの高い所を用意しておけ
 - 一、懸指定の住居適地より低い所へ家を建てるな
- 昭和十年三月三日